

JRA事業 地域セミナー 「酪農の今を学び、将来を考える」の概要

本会議は、公益財団法人全国競馬・畜産振興会畜産振興事業の助成を受け、平成29年度から30年度の2か年にわたり「酪農経営・労働条件実態調査事業」を実施し、その結果を踏まえて、北海道立農業大学校と中国四国酪農大学校において地域セミナー「酪農の今を学び、将来を考える」を開催した。

1. 地域セミナーの目的

本会議は、「酪農経営・労働条件実態調査事業」の一環として、全国の酪農家を対象とする「平成29年度経営実態調査（酪農全国基礎調査）」によって、酪農経営の実態、酪農家の経営意向、酪農労働条件の実態等を明らかにした。また、労働条件の改善に積極的に取り組んでいる酪農家を対象とする「平成30年度事例実態調査」によって、その取り組みの成果と課題を明らかにした。

「地域セミナー」は、これら調査の結果、とくに労働問題と経営・作業条件の関係、過重労働問題の改善に向けた取組、各地域で取り組むべき対策などを、農業大学校の学生など将来の酪農経営の担い手と共有し、わが国の酪農生産基盤の強化に資することを目的としている。

2. 地域セミナーの内容

(1) 北海道立農業大学校

- 1) 開催日時：平成31年1月18日 10：40～12：10
- 2) 参加者数：69名（1年生25名、2年生26名、普及員13名、教職員5名）
- 3) 講演内容

① わが国の生乳生産基盤をめぐる情勢－酪農全国基礎調査結果のポイント－

講師：中央酪農会議 事務局

酪農全国基礎調査の結果を踏まえて、生乳生産基盤の変化と酪農労働に係わる問題を中心に報告した。とくに参加者の関心を惹いた話題は、搾乳形態別の搾乳時間であり、「搾乳ロボット」の導入によって1日当たりの搾乳時間が短縮している実態であった。毎日繰り返される搾乳作業の省力化に対する関心の高さがうかがえた。

また、アンケート調査において、過重労働への危機意識を再認識し、経営に携わる際にはその対応を

工夫したいという意見もみられた。

② 酪農経営における労働問題とその対応策

講師：帯広畜産大学 教授 志賀 永一氏

酪農労働問題の対応策として、雇用従事者の安定的な確保の必要性について強調した。その中で、雇用従事者の定着を促す方策を明らかにする手法として、雇用従事者が労働条件にどの程度満足しているかを評価する「職務満足度分析」を紹介した。

また、新規就農者に向けたアドバイスとして、他者の良いとことを真似ることが自身の成長への近道であるという「カンニングの勧め」は、多くの学生の関心を惹いた。

(2) 中国四国酪農大学校

- 1) 開催日時：平成31年2月28日 10：00～12：10
- 2) 参加者数：50名（1年生19名、2年生25名、教職員6名）
- 3) 講演内容

① わが国の生乳生産基盤をめぐる情勢－酪農全国基礎調査結果のポイント－

講師：中央酪農会議 事務局

② 酪農経営における労働問題とその対応策

講師：岡山大学大学院 教授 横溝 功氏

平成30年度事例実態調査の対象となったM牧場（岡山県）とH牧場（香川県）における労働条件の改善に向けた取組を紹介した。M牧場は家族型経営で、3世代の潤沢な家族労働力を活用しつつ、機械化により効率的でゆとりのある経営を目指している。

H牧場は雇用型経営で、雇用労働力によって酪農部門、肉牛部門、乳製品部門を効率的に運営している。とくに、雇用従事者が定着し、労働意欲を持続する工夫として、経営上の情報を共有する機会を定期的に設けていることが注目される。

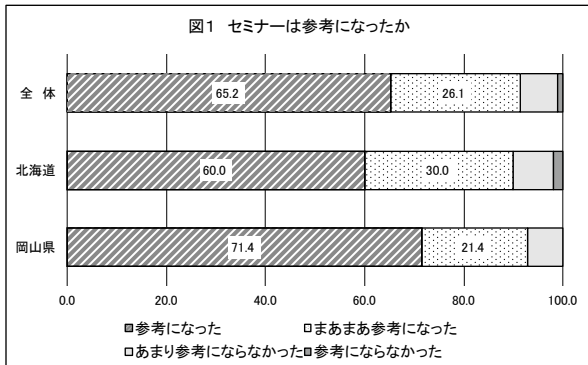
また、自らが将来、家族型経営や雇用型経営を選択するために参考になったという意見があり、学生の理解度と感心の高さがうかがえた。

3. 地域セミナーの評価

以下では、セミナー終了後に実施したアンケート調査の結果を紹介する。セミナーに参加した多くの学生等から有意義な回答が得られた。

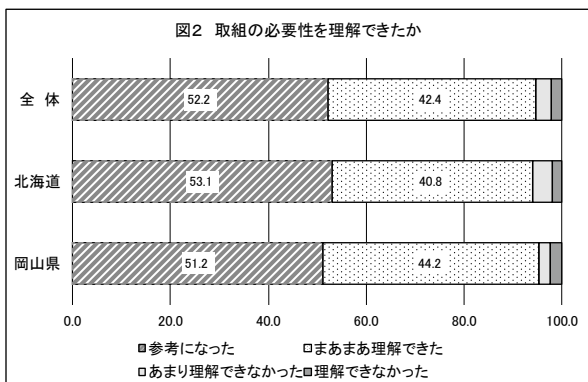
(1) セミナーは参考になったか (図1)

北海道立農業大学校 (図中、「北海道」)、中国四国酪農大学校 (図中、「岡山県」) とともに、参加者の90%以上から「セミナーは参考になった」という回答を得た。しかし、北海道では、説明時間がやや短く、理解しづらい点があったという意見もあり、今後の反省点と言える。



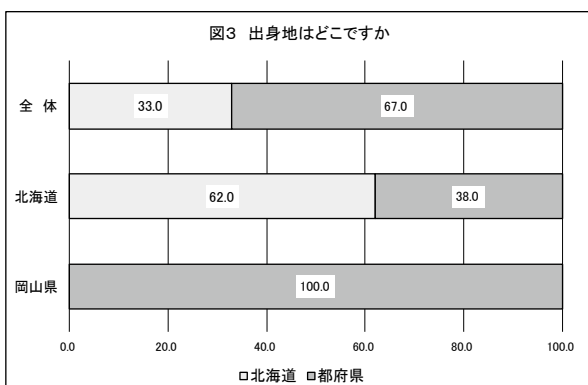
(2) 取組の必要性を理解できたか (図2)

両校において、90%以上の参加者から「労働問題に取り組む必要性を理解できた」という回答が得られた。ほとんどの参加者が就農前の学生であるため、セミナーの中心課題である労働問題を理解することが困難であると考えられたが、丁寧な解説によって高い評価を得た。



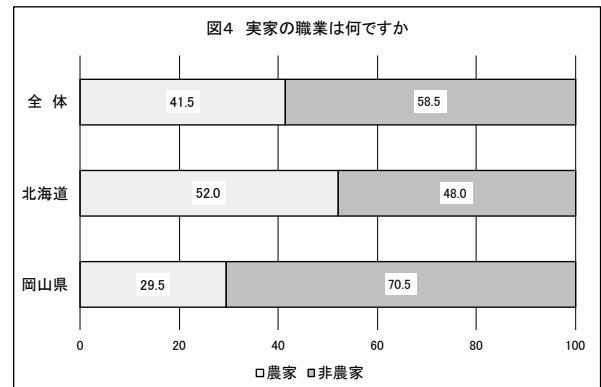
(3) 出身地はどこですか (図3)

参加者の出身地を聞いたところ、北海道立農業大学校では北海道出身者が62.0%、都府県出身者が38.0%であったが、中国四国酪農大学校では都府県出身者が100%を占めていた。なお、両校とも海外出身の学生はいなかった。



(4) 実家の職業は何ですか (図4)

北海道立農業大学校では、農家出身者と非農家出身者の割合が拮抗しているが、中国四国酪農大学校では非農家出身者が70%以上を占めている。



(5) 酪農家になりたいですか (図5)

将来の職業について聞いたところ、酪農家になりたいと回答した参加者の割合は、北海道立農業大学校では80%以上、中国四国酪農大学校では60%近くを占めた。

また、自由記述欄に記載された「酪農家になりたい理由」としては、「365日休みなく働く仕事に誇りを持つから」、「長く受け継がれてきた職業に誇りがあるため」、「家族で一緒に仕事をできるから」、「観光資源としての自然や景観を守っていききたいから」などである。

さらに、酪農家になってやりたいこととして多くの学生があげたのは「六次産業化」で、そのほかに「夫婦での経営」、「牛一頭一頭に目をかけられる経営」、「従事者が働きやすい環境の整備」、「省力化機械の導入」、「酪農教育ファーム活動や観光牧場」などがあつた。

